【教員寄稿】

「さあ、独り旅をしてみませんか？」

三田千代子

新入生、在校生の皆さん、新たな希望に満ちた思いで新学期を迎えられたことと思います。

学科の教壇に立って30年という節目の年に担当講義の最後の年を迎えました。学科を去るに当って何か寄稿するようにというお話を学科からいただき、さてこれから多くを学ばれて成長していく学科生の皆さんに私は何を伝えることができるのか思案しました。昨年度の後期定期試験が終了した時、「皆さん、（新学期まで何にも縛られない自由な）せっかくの春休みを有意義に過ごされるように。私の学生時代を振り返ると春休みには京都と奈良を毎年旅行していました」と何とも意味の分からないことを口走ったことをふと思い出しました。期末試験場を後にしながら、私は何を伝えたかったのか思いめぐらしました。確かに京都奈良の古寺旧跡を歩き回り最後に円山公園の枝垂れ桜を愛でて帰京して新学期を迎えるのが私の春休みの過ごし方でした。できれば海外に繋がる仕事をしたいと思っていた当時の私は意識して日本を知っておこうと、国内旅行をしながら（今はすっかり忘れてしまった）日本史の勉強をして歩き回りました。当時は海外渡航が解禁されて数年、しかも1米ドルが365円、年間の外貨の持ち出し額は500米ドルまでという時代でしたから、休暇中にちょっと海外旅行という時代でもありませんでした。それにしても試験終了後になぜ旅行を勧めたのか、これでは答えになりません。まだしつこく帰りの電車の中で一点を見据えながら答えを模索していました。老女が思い耽る姿は疲労感を漂わせるらしく、斜め前に座ってパソコン操作をしていた若者がそのパソコンを開いたままでさっと立って席を譲ってくださいました。運動も兼ねて車中では立つことにしている私は戸惑いながらも、若者の思いやりに素直に感謝して座りました。立ってまでパソコンを開いて仕事を続けている件(くだん)の若者の姿が視野に入り、社会に出て働くということはこういうことなのだと思いを新たにしました。と同時に、こうして一度社会に出て仕事をするようになると、何物にも囚われない視点をもって（もちろん日本で社会化を受けた人は日本人としての価値観を身に付けてです。いかなる価値観からも自由に事象を眺められる人はいません。これに成育歴が加わるのですからここで「何にも囚われず」といっても絶対的なフリーではありません）自由な心での旅行などはできなくなるのだということを思い出したのです。あの定期試験後にふと口にした言葉には、宿題などのないこの春休みに独り旅を経験してみて欲しいというメッセージが込められていたのだということに気付いたのです。そう、私は、若い時に心を自由にして「未知の世界」に触れて感動する経験をして欲しいと伝えたかったのです。社会経験をする前と後では、旅から得るものが全く異なってくるのです。

大学卒業後2年間かけてアメリカ大陸を経てヨーロッパ各地を訪れました。留学先のポルトガルに戻る友人とローマのテルミニ駅で別れた後、ローマ、ポンペイを独りで観光して歩

きました。ローマのシスチーナ礼拝堂でミケランジェロの「最後の審判」を仰ぎ見た時、頭の中でガーンという音が響きました。理由は判りません。きっと 500 年も前のミケランジェロのエネルギーに圧倒されたのだと思います。そしてポンペイの遺跡を見学しながら想像すらしたことがないことを体験しました。

ポンペイは火山の噴火で一瞬のうちに埋もれた町です。町を走る大理石の狭い道にくっきり残された轍の跡を見ていると、馬車の走る車輪の音が聞こえてきたのです。色彩豊かな絵が施された公衆浴場の前に立つと、沐浴する人々の喧しい声が聞こえてくるのです。まさに今そこでローマ時代の人々が生活しているのです。そう、まるでタイムスリップしたような錯覚に襲われました。

こうしたポンペイとの衝撃的出会いから 15 年ほど経て再度ポンペイの遺跡を家族と共に訪れました。観光地として整備が進み、遺跡の風化を防ぐための展示方法が工夫されていました。噴火から逃げる途中で溶岩にのみ込まれて倒れた遺体が路上に展示してありました。私には石膏の塊にしか見えませんでした。考えてみればポンペイの町は火山の爆発によって一瞬に溶岩に飲まれてしまったのですから、作り物の展示品とはいえ、遺体の存在は「現実」なのです。にもかかわらず、かつてのような感動を覚えることはありませんでした。

20 歳代から 30 歳代という 10 年以上の月日は私の社会での経験を豊かにし、自分の視点で世の中が見えるようになっていました。その一方で、若さゆえの感性は後退してしまっていました。若さに備わった鋭い感性は、どうも社会経験に邪魔されてしまうようです。何にも邪魔されずに自由にかつ一心に目の前の事象のみに目を向ける集中力がなくなってしまったのでしょう。かつては独りで訪れたゆえに、私の感性は研ぎ澄まされ、一瞬とはいえ直観力も磨かれたのではないかと思います。

学生時代の友人との旅は賑やかで笑いが絶えない楽しい思い出となります。でも、賑やかな楽しい旅行は年齢を重ねてもできます。今は自分の本質とは何かというような人間を深めることに繋がることを考える時間を旅を通じて持ってみてはどうでしょう。20 歳代の今だからできる独り旅に挑戦なさってはいかがでしょう？ただし身の安全には充分に気を付けることを忘れないでください。

ポルトガル語の学習やルーゾ・ブラジル研究は、学科生として当然のことであると同時に重要なことです。なぜなら、一部の学生を除き大部分の学生にとってこれら学科の勉学は、将来人間としての幅や深みを増すための有効な手段のひとつとなるものだからです。そしてもうひとつ、雑多な社会を知る前に、豊かな感性を持つ今を大切な時として独りになって対象物と対峙してみてください。そこに見えるものや聞こえてくるものは、他者には経験できないことです。唯一の経験をすることで、人としての深みや幅がここでも身に付くのではないかと思います。

教壇を去った後も、学科生として、学科の卒業生として皆さんが豊かな人生を送られることを願っております。